

鼻（抜粹）

芥川龍之介

ぜんちないぐ
禅智内供の鼻と云えば、池の尾で知らない者はない。長さは五六寸あつて上唇の上から顎の下まで下っている。形は元も先も同じように太い。云わば細長い腸詰めのような物が、ぶらりと顔のまん中からぶら下っているのである。

五十歳を越えた内供は、沙弥の昔から、内道場供奉の職に陞つた今日まで、内心では始終この鼻を苦に病んで来た。勿論表面では、今でもさほど気にならないような顔をしてすましている。これは専念に当来の浄土を渴仰すべき僧侶の身で、鼻の心配をするのが悪いと思ったからばかりではない。それよりむしろ、自分で鼻を気にしていると云う事を、人に知られるのが嫌だったからである。内供は日常の談話の中に、鼻と云う語が出て来るのを何よりも惧れていた。

内供が鼻を持てあました理由は二つある。——一つは實際的に、鼻の長いのが不便だったからである。第一飯を食う時にも独りで食えない。独りで食えば、鼻の先が鉢の中の飯へとどいてし

まう。そこで内供は弟子の一人を膳の向うへ坐らせて、飯を食う間中、広さ一寸長さ二尺ばかりの板で、鼻を持上げていて貰う事にした。しかしこうして飯を食うと云う事は、持上げている弟子にとつても、持上げられている内供にとつても、決して容易な事ではない。一度この弟子の代りをした中童子が、噓をした拍子に手がふるえて、鼻を粥の中へ落した話は、当時京都まで喧伝された。——けれどもこれは内供にとつて、決して鼻を苦に病んだ重なる理由ではない。内供は実にこの鼻によつて傷つけられる自尊心のために苦しんだのである。

池の尾の町の者は、こう云う鼻をしている禅智内供のために、内供の俗でない事を仕合せだと云った。あの鼻では誰も妻になる女があるまいと思つたからである。中にはまた、あの鼻だから出家したのだろうと批評する者さえあつた。しかし内供は、自分が僧であるために、幾分でもこの鼻に煩される事が少くなつたと思つていない。内供の自尊心は、妻帯と云うような結果的な事実に左右されるためには、余りにデリケートに出来ていたのである。そこで内供は、積極的にも消極的にも、この自尊心の毀損を恢復しようと試みた。